

特集
高知
〜いごっそうとはちきんの国 土佐〜

Special Features
Kochi
Country of stubborn men (Igosso) and lively women (Hachikin)-Tosa

地域に親しまれるインフラ
Infrastructures appreciated by the local community

暮らしを支えた四万十川流域の近代化遺産

溝渕博彦

MIZOBUCHI Hirohiko

高知県文化財課/課長補佐



1——大河・四万十川

四万十川は高知県の西部を流れる1級河川で、全長196km、四国第1位の長さである。流域面積は2,270km²あり、吉野川の3,750km²に次ぐ第2位の大河で、四万十川流域のうち高知県内で占める割合は約83%である。

四万十川は愛媛県境の石灰岩地形四国カルストの東端、津野町北西部にある標高1,336mの不入山東斜面の1,200m付近にその源を発し、高知県中西部を東西南北に激しい蛇行を繰り返し、多くの支流を集めて大河となり、四万十市下田初崎で土佐湾に注いでいる。支流の数は第1次支流が70、第2次支流が200以上、さらにそれらの支流の小さな谷を含めると300を超える多さになるだろう。中でも長さ30kmを超える四万十川最大の支流梶原川は、不入山の主流源流地点の西側になる四国カルスト五段城(東津野村)を源とし、本流と並ぶ大きな流れを形成している。

四万十川の名前の由来は数説ある。アイヌ語で岩石の多い場所を「シマ」と呼び、四万十の名はその岩石の多さに由来するというもの。また物理学者の寺田寅彦はア

イヌ語で「シ(はなはだ)マムタ(美しい)」説を唱え、たぐさんの支流が集まってできた川から来た呼び名という説、梶原町四万川と十和村十川の地名との合成語説、四万石の木を十回流送する森林があったという林業説等々である。

四万十川は流域の地形や河川の形状、水量、景観などによって上流(津野町/旧東津野村の源流地点から四万十町家地川の佐賀取水堰まで)、中流(佐賀取水堰から四万十市/旧西土佐村の広見川合流地点まで)、下流(広見川合流地点辺りから四万十市/旧中村市の河口まで)に大別される。上流は比較的直線的な急流、中流は激しい蛇行と岩場が多く、下流は緩やかな蛇行と流れが続く。四万十川はその1/3を流れた辺りで窪川(四万十町)に入る。この辺りで西に流れを変え、海側から山に向けて流れる格好になっている。河床勾配が緩やかなことが四万十川の特徴で、河口から100kmほどの間での高低差は少なくほとんど平らである。そのためにダム建設が進まなかったともいわれる。

清流と呼ばれ親しまれている四万十川であるが、四



■写真3—佐川橋(四万十町)

万十川流域は全国有数の多雨地帯であり、古くより度々洪水の被害を受けている。そのため、四万十川に架けられた橋は洪水時に強い沈下橋が多く、本支流を併せて沈下橋は47を数える。平成5年に高知県は本支流の沈下橋を、流域の生活を支えた貴重な生活文化遺産として保存する方針を決定している。

2——流域の土木遺産

①里川橋(高知県高岡郡四万十町浦越)

里川橋は昭和29年に架設された沈下橋である。ほとんどを山林が占める地域の振興には道路網の整備が重要事項であった。それまでの渡し舟や板橋、吊り橋などに替わって、四万十川流域では昭和10年代から沈下橋が次々と架けられた。沈下橋は水の抵抗を少なくするため欄干を持たず、経費・作業の面で架設し易く、半永久的であったため、四万十川流域では昭和30年代後半まで花形の橋梁として架設された。

里川橋は建設当時橋脚が13本であった。しかし、台風などの洪水で1本の橋脚が度々流出し通行不能となった。そこで何回も復旧工事を行ったが、洪水ごとにその同じ橋脚が流出するので、1本空けて災害復旧工事を行

ったところ流出が無くなった。

②佐川橋(高知県高岡郡四万十町下津井)

佐川橋は国有林のある佐川山から大正町田野々を結ぶ旧森林鉄道用の橋であり、ダム建設での軌道の敷設替えのために建設したものである。昭和19年、梶原川に津賀ダムが竣工し、その上流にあたる佐川橋のある下津井はダムの湛水域になった。水位が上昇し、多くの土地が水没するため、その年に今の高さの橋が完成した。

津賀ダムは大戦中に愛媛県新居浜市にある軍事工場に電力を送電するために陸軍の監視の下、突貫工事で建設された。橋の設計は柏原一平(営林局設計主任)、施工は日本発送電(株)で、工事には朝鮮の労働者が携わった。完成した津賀ダムから新浜の軍事工場へ電力が送電されたのは僅か1年足らずの間。周辺に電力が供給されるようになったのは昭和23年である。

佐川山発の森林鉄道は周辺奥地から搬出される木材を満載して佐川橋を渡り、梶原川右岸を走り大奈路で梶原川を渡り左岸を通行、終点は旧大正町田野々の貯木場であった。佐川橋はそのアーチの形から通称メガネ橋と呼ばれ親しまれていた。トロッコには乗務員が乗る車両を連結していたが、一般住民は乗れず木材だけを運んだ。軌道のレールは日露戦争の戦利品で、旅順要塞で使われていた別名「満州レール」と呼ばれていたものを使用していた。現在、軌道は剥がされ、今は橋の上を水道が渡っている。

③木屋ヶ内トンネル(高知県高岡郡四万十町木屋ヶ内)

木屋ヶ内橋から約150m下流の梶原川左岸に旧森林鉄道の木屋ヶ内トンネルがある。対岸は国道439号線。トンネルは梶原川が大きく蛇行する位置にあり、その蛇行する梶原川に侵食され、突き出した形になった山を掘削しトンネルを抜き、森林鉄道の緩やかな直線を保っている。このトンネルは前述の津賀ダム建設に伴い整備さ



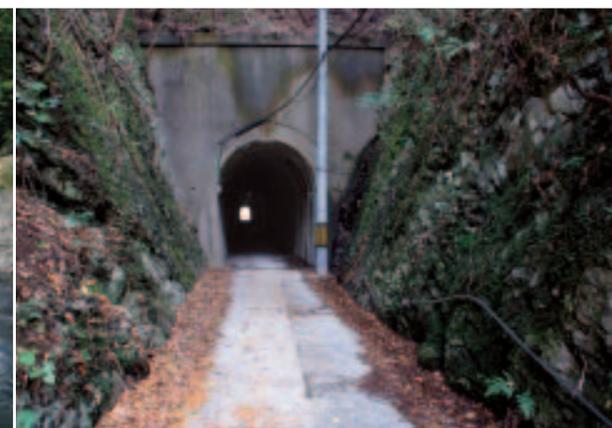
■写真1—向山の沈下橋(四万十町)



■写真2—里川橋(沈下橋/四万十町)



■写真4—木屋ヶ内沈下橋(四万十町)



■写真5—木屋ヶ内トンネル(四万十町)



■写真6—大正橋(四万十町)

れたものだ。

トンネルの入り口には数件の民家がある。現在のトンネルは枕木やレールを取り除いて舗装され、電燈もあって町道として一般に利用されている。トンネル内には水道管などが敷設され、町民の生活の利便性が図られている。森林鉄道の時代が終わり、トロッコは通らなくなったが、このトンネルは対岸から沈下橋を経由する住民にとってなくてはならない生活道である。

大正管内の森林鉄道は四国に残る最後の森林鉄道であったが 昭和41年3月にその運行の長い歴史に幕を閉じた。

④大正橋(高知県高岡郡四万十町大正)

大正13年に着工した県道窪川～宇和島線は、昭和2年に全線が開通した。昭和3年3月には大正橋が完成した。架設費用は当時の金額で105,500円を要した。これより以前、大正15年頃には現在の大正橋より50mほど上流に、高知県が木橋を架けている。この橋の名残が、現在も吾川側に2基の古い橋台として残っている。

梶原川の旧田野々付近も人や物の運搬は渡し舟であった。川の増水や台風時には往来ができず、対岸の吾

川地区や下流の人々の生活に不便をきたしていた。大正橋の完成により江川崎・宇和島方面へ自動車の往来が可能となり、橋は沿線地区の経済・文化の発展に大きく寄与した。

橋の設計は高知県が行い、施工は飛鳥組が担当した。地元での聞き取りによると、コンクリートは全て手練りで打設し、付近の女性たちも手伝って鉄筋を括りに行った。鉄骨の継ぎ手には真っ赤に焼いた鋸を投げ、それを受け止めては打ち込みリベット打ちを行った。鉄骨には「SEITETUSHO YAWATA」の刻印が残っている。地元の人々はこの橋を赤鉄橋と呼んで親しんでいる。

3—「大正美人の会」の活動

旧大正町では、心優しい女性を意味する「大正美人」という呼称がある。その呼称の下、大正出身の「はちきん」の女性たちが集まって、「奥四万十の元気源流 大正美人の会」を平成17年4月に結成した。大正美人の会は地域の振興と住みよい地域づくりを目指し、元気な郷土を未来に伝えようと小さな力を寄せ集めて活動している。

四万十川流域は人口流出などで過疎化が進み、休耕田や山林化した畑が増え、景観や生活環境の良好な保全が危惧される現実に直面している。大正美人の会は未来へ伝えていくべき郷土の価値を再認識し、自然景観や文化遺産を守り活用しながら、活気ある住みよい地域になることを目指している。

平成17年には藩政中期の山間民家「国重要文化財旧竹内家住宅」の活用を関係機関に提案した。それまでは月2回であった公開日を、月曜を除く連日公開とし、県内でも今は貴重となった山間民家の特徴と伝統技術を広く伝える機会を得た。ここでは、地域の高齢者や保育園児との交流機会を持つため、七夕祭りや暮れの障子貼りなどを行い、併せて石の風車で知られる轟公園近



■写真7—竹内家住宅の七夕(四万十町)



■写真8—森の音楽会(中津川自然風景林/四万十町)



■写真9—向山橋(沈下橋/四万十町)

傍の郷土資料館・移築茅葺民家の門脇家住宅の公開活用活動も行っている。

昨年度は「高知県豊かな環境づくり総合支援事業」への提案で、四万十町域の築50年以上を経過した建造物の登録文化財調査活動を四万十町との協働で各地域の住民参加で行った。その結果28ヶ所42物件を国の登録有形文化財申請候補物件としてリスト化し、文化庁への申請が可能となった。

また、平成18年3月の合併で広域化し共有の郷土となった四万十町の文化や文化財を核に、地域づくり活動のネットワーク化を進めた。今年度の後半からは、大正美人の会と住民による登録文化財建造物を活用した地域づくりがさらに進行するであろう。



■写真11—新谷橋(沈下橋/四万十町)



■写真10—中津川里山の風景(四万十町)

4—次世代に伝える自然文化遺産

四万十川流域の魅力は、四季の変化の中でうつろいゆく気候・地形・植物・動物・色彩・民俗・集落景観・自然景観などの自然と文化が複合的重層的に織り成すことにある。朝霧の中で紫色に光る川面、夜の山道でのニホンジカやウサギの輝く目、南国土佐では珍しい夏の涼しさ、支流各地での七夕行事、一味違う四万十料理、特に流域住民の人情には癒される。

四万十川の四季の美しい景観の中には、かつての森林鉄道跡のトンネル、アーチ橋、沈下橋など数々の近代化遺産がたたずんでいる。その他にも風景林や溪谷、山間の茅葺民家、山菜や鮎などの伝統料理、川を中心とした伝統的な民俗・芸能・技術など、地域の宝物といえるものがまだまだ豊富なゾーンでもある。

四万十川に沈下橋などの近代化の波が押し寄せるには、長い時間がかかっている。渡し舟から板橋になり、昭和初期になってやっと鉄筋コンクリート造りの沈下橋が導入された。沈下橋は増水時に水没するだけの橋ではなく、流域の人々に京阪神からの文化を伝播させることにも貢献し、人々の暮らしを守りながら、文化意識の向上に寄与してきた。このように、この場所では「地域づくり」と「ものづくり」の原点が確認できる。

自然や風土のもつ大きな癒しがあるとすれば、四万十川での体験は確実にそれらを満たしてくれるであろう。文化的景観とは地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地であり、我々の生活又は生業の理解のため欠くことのできないものと定義される。

昨年から四万十川では、文化的景観の調査を、県と流域市町村の各分野の担当が協働して推進している。この文化的景観を保護し、活用しながら次の時代に引き継ぐシステムの構築に尽くしたい。